

第一三章 健康の概念

1 はじめに

医療人類学の歴史をひもとけば、病気概念の翻訳という研究テーマは、病気が普遍的な生物学的現象であるところから出発していることがわかる。生物医学的な疾病 (disease) の普遍性を里程標として、文化が規定するユニークな疾患あるいは病い (illness) の多様性をなめるといふ学問的作業が試みられてきた。人間の病気は生物学的には単一だが、社会的かつ文化的存在である人間は、それを社会や文化のフィルターを通して解釈しているのだという認識論的前提がある。行為者たちが、文化という脈絡のなかで病気に対してどのような語彙と概念を用いて理解し、それに対処しているのか、さらにはそれをどのように次の世代に伝えているのかを、生物学的事実という絶対的な座標から定位することができると考えたのである (Brake 1961)。

だが、それはいささか楽観的な見込みに他ならなかった。個々の病気の民俗的語彙とそれに随伴する対処行動の多様性が指摘され、また人びとの病気経験の物語性とその固有性に関心が移行するに及んで、医療人類学者の当初の目論見は大幅に修正せざるをえなくなった。他方、社会人類学が長年主張してきた「文化の翻訳」という取り組み方そのものが、ある種の権力関係を前提に考案されたものであり、認識論的に自由な立場を保障するものではないという指摘もな

され、文化概念は再考を迫られている。

これらの教訓から、病気と健康の概念についての文化間の翻訳の問題は、現地の固有な概念を民族誌調査を通して析き出させるという作業だけでは不十分である。この研究は、外部からもたらされる健康、すなわち公衆衛生的な実践とそれが人びとに受容あるいは拒絶されていく過程をも視野に入れなければならない。健康の概念がどのようにとらえられているか、ドローレスの人びとについて調査された資料にもとづいて考えてみる。

2 健康の用語とその概念

メスティソ農民であるドローレスの人びとにとって「健康であること」が意味するものが、我々が感じている健康の意味と同じであるという証拠はどこにもない。まず、この前提から出発する。実際、人びとに対して「健康とは何ですか」(¿Qué es [la definición de] la salud? ¿Qué piensa sobre [la definición de] la salud?)と問うても、なかなか明確な答えは出でず、熟考した上でも「病気でないこと」という一様な説明しか返ってこなかった。それでは、健康を意味する語彙を彼／彼女らのもっていないかというところ、決してそうではない。ドローレスでは健康に関する次のような語彙が見つかるだろう。

salud …… サル [名詞]

健康。人の健康状態を表すには、普通「よい」bien という形容詞がつき、Está bien [de] salud

(～は健康です) などと表現される。サルには挨拶という意味があり、挨拶の際に相手の健康をたずねる——「¿cómo se encuentra?」——ことと関連している。

sano/-na …… サノ、サナ [形容詞]

健康な。まったく病気でないこと。

alentado/-da: アレントド、アレントダ 「形容詞」

元気な。健康に関する表現のなかで多用される。絶対最上級の *Esta alentadísimo* (〜はいたって元気です)、これに接尾辞としての縮小辞 (示小辞) がついて *Esta alentadito* (〜は元気です) となる。

これらは、一般的なスペイン語の用法から大きく逸脱するものではない。一般的にドロレスの人びとは「健康」についてよりも「病氣」についてより多くの関心を持ち、保健に関する話は常に病氣に収斂しがちだ。だが、しいて「健康とは何ですか?」と聞くと、「タバコを吸ったり、酒を飲んだりしても、害にならないこと」「どんな食べ物でも食べられること」という答えが返ってくる。したがって、健康の第一の定義は、何ら問題のないこと、ということになる。

多食できることが健康を意味することは、しばしば言及される。ドロレスの人びとは一般的に、食べ物がふんだんにあるという状況で生活しているわけではない。したがって日々の食べ物のみならず想像上の食べ物についても、多くのことを語る。食べ物をよく食べられることは裕福なことを示唆するが、同時に食が満たされていれば健康、つまり何ら問題がないということになる(第九章参照)。

ところで、何ら問題のない者は健康である。何ら問題のない者はたくさん食べ物を食べることができる。多食する者は屁がたくさん出る。したがって、屁がよく出るとは健康の証拠である、という一種の民俗的思考の産物が語られる。屁が出ないことは、コンヘスチオン (constipation) という腹部への不快を伴う不健康な状態すなわち病いとみなされる。放屁には、健康なものとする消化管症状を主徴とする数々の民俗疾患の語彙を持ち、細かい観察眼をもつてぬ関心を持ちエンパチヨをはじめとする消化管症状を主徴とする数々の民俗疾患の語彙を持ち、細かい観察眼をもつていることは、すでに前章で指摘した通りである。ただし屁 (pedo) について語ることは、無教養なこととされ、公的な場では語られない。また、この屁による健康観は男性である筆者が、男性の村人との間のインタビューや日常会話にお

いて採集したものであり、女性との会話では、屁を病理的な身体現象と結びつける議論以外では触れられることのないテーマであった。したがって、ここでの議論は、男性にとつての健康と放屁の関係ということになる。

次節で述べるように、人びとは病氣との一体感を表明し、自分の人生を健康であると主張する人はきわめて少ない。しかし自分は健康であると主張する人たちも稀にいる。中年男性のドン・チコ (仮名) は、その一人である。彼は、自分はいつも健康 (alentado) であると言う。「熱があつても、水のシャワーを浴びれば治る」のだと言う。このような表現は、現地において、たいへん挑戦的な言辭である。なぜなら風邪をひいたり熱があつたりすると、人びとは病氣が終るまでの期間——普通八日目まで——シャワーを浴びないという習慣があつたからである。八日目とは一週間のことを表現する。このような勇気のある発言や行動を行うのは男性だけである。男性は女性に比べて壮健であるという観念を表現する言葉がこの社会にはいくつもあるが、ドン・チコの表現も男性らしさを強調したものとして考えることができる。

「Alentado, あなたはそのように元気なのであろうか?」とドン・チコに質問すると、「神さまのおかげさ (Por voluntad de Dios)」と彼は答えた。この表現は日常生活のなかでの挨拶や会話上の相づちとして一般的に多用されるが、カトリックの信仰に親しみのある者なら紋切り型の返答であることがわかる。この場合の「神さまのおかげ」というのは、自己の意思を運命にゆだねるという意味もあるからだ。博打に勝つことも、宝くじに当たることも神の意志 (voluntad) にゆだねられている。他方、神は病氣や不幸を癒すものであり、決して人びとに制裁を加えたりはしない。つまり病氣を引き起こす存在ではない。神の意志は人びとが健康であることを意味する。人びとは言う。「神への信仰 (fe) によつて、人は癒される、神のみが癒す」「神は人を病氣にさせることはない、悪魔だけがそれを行う」。これらの言葉は、病氣の原因として悪魔とその手先とみなされている妖術師 (magos/hechiceros) の存在を示唆するが、公的な場で妖術の告発が行われることはない。病氣は人が関わる領域であり、治癒の神的要素あるいは偶然的要素が強調される。

3 疾患の用語

健康とは何か、という問いに対する返答のほとんどが、病気がない、というものであった。したがって、人びとにとって健康の内実をあれこれと詮索するよりも、病気とは何かという問いを行い、そこから健康を考えると方法もある。健康の対極にあると考えられているもの、すなわち病気というものの対比によって人びとははじめて健康という言葉に輪郭を与えるようになる。

病むこと、あるいは病気に関する用語として、人びとは次のようなものをあげる。

enfermedad : エンフェルメダ [名詞]

病気。健康でないこと。近代医療的な病気を意味する言葉である。「疾病」としても用いられる。なおアメリカ合衆国ならびにカナダで発達した、つまり英語を主要な言語とする医療人類学では、文化的な意味合いをもたせた疾患あるいは病い (illness) と生物医学的概念にもとづく疾病 (disease) を区別するという学問的慣用法があるが、スペイン語では専門用語としても一般的な用語としても、それを区分する用語法はない。

enfermo/-ma : エンフェルモ [形容詞] [名詞]

病気の。病人。病気の状態をますが、具体的な病人を想定していることが多い。Esta enfermo (彼は病気だ)。しかし Esta enferma の場合には意味が二つあり、ひとつは通常通り「彼女は病気だ」であり、他のひとつは「彼女は妊娠している (Esta embarazada)」と同義になる。もともとエンバラサル (embarazar) には、再帰動詞としての「妊娠する (embarazarse)」と他動詞としての

「困惑させる・邪魔する」という用法があるためである。しかしながら、人びとは妊娠を人間の自然的な過程と考えており病気とは考えていなかった。縮小辞が付いて enfermito/-ta となると「頭のおかしい」「気の触れた」という意味が変わる。

mal/-la : マル [形容詞]

具合が悪い状態。病気以外にも使われるので enfermo/-ma より包摂的な概念を指し示す。

guayco/-ca : グアイコ [形容詞]

病気の状態。この形容詞は病気の状態のみに使われる。名詞形はグアイケンシア (guayguencia)。スペイン語正書法にはみられない。

dolama : ドラマ [名詞]

具合が悪い。マルと同じである。用法例としては Esta con dolama (彼は病気である)。スペイン語正書法にはみられない。

acaimentado/-da : アカイメントダ [形容詞]

骨や身体の痛みを主とする病気である状態。用法例としては Me siento acaimentado (私は身体が痛い)。この語はスペイン語正書法にはみられないが、「落ト」という名詞 (caimiento) の派生と思われる。

padecimiento : パデシメント [名詞]

どこが悪い、慢性的に具合が悪い時に使われる。苦悩や苦境という意味がある。

dolencia : ドレンシア [名詞]

苦痛。痛み (dolor) や病気のことである。病気の苦しみが痛みとして表現される用語である。若い人の間には、老人だけが知っている古語あるいは死語だという人もいる。

peste ……ペステ [名詞]

疫病より転じて病気のこと。Estoy con la peste (私は病気です)。

adigusto ……アディグスト [名詞]

病気。用法例として Me siento adigusto (私は病気です。直訳は「私は病気を感ずる」)。イペリア半島のスペイン語正書法にはみられない用法である。

4 病気と貧困

このように病気に関する語彙は豊富にあり、その用法も多岐にわたる。日常生活においても人びとは、病気に対してある種の一体感や親和性をもっている。私が調査期間中に村落の各戸を訪問して、世帯の誰かが過去一定期間内に「どんな病気をしたか？」について、質問していた時である。質問に答えた人の多くは、成人の女性であった。彼女たちの回答は「私たちはいつも病気よ (Estamos siempre enfermos)」であった。

「それは、どうしてか？」という私の質問に、ほとんど紋切り型に「薬を買うことができないから」という答えが彼女たちから返ってきた。この返事の意味を理解することは容易ではない。というのは私はドローレスにはじめて住んだ「中国人 (Chino)」であり、人びとが私が保健省で働くボランティアであることをよく理解していたからである。したがって村の女性は、外国人である私に何かの援助を訴えている可能性がある。もし、そうだとしたら、病気と貧困の因果関係とも言える主張があるとは言えなくなるからだ。

しかし、長い調査期間を経ても、彼女らの返答「私たちはいつも病気よ」がなくなることはなかった。したがって、貧乏な家族では病気になっても薬を買うことができない。薬を買えないと病気が悪化する。だから貧乏人は病気とともにあるという考え方には、人びとは慣れ親しんでいると言える。病気は人間生活一般に常に遭遇する出来事であり、そ

れを治療するのは薬であり、それを買う経済力が、健康を保証している。

他方で、彼らは病気になったと言いつつ、実際に身体の不調を日常的に抱えているにもかかわらず——少なくとも私の感覚では——けっこう「健全」に暮らしているように見える。世界保健機関の健康の定義は、身体的ばかりでなく、精神的にも社会的にも健全な状態というが、彼らにおいてはその順序は倒立している。彼らはまず必要とされる身体的健康には問題を抱えながら、社会的および精神的には健全という、近代医学からみるといささか不可解な健康のなかに暮らしている。身体管理の発想とそれを支えるテクノロジーが、根本的に生物医学のそれとは異なっているようだ。北西アマゾンのトゥユカ人は、ウィシグという幼児の栄養不良症を民俗的なタブーを破ったことで説明するが、同時に栄養不良と消化管寄生虫感染のための近代医療を拒絶しようとしていない。ただし、近代医療の効果性についてはトゥユカ人自身は、人びとの独自のコスモロジーから説明している(武井 1990)。ドローレスの人びともまた、病気との一体感を生活の基調として説明するが、それを近代医療の対応物としては説明しない。

他方、ホンジュラスの首都にある保健省内部では状況がまったく異なる。私が日本の援助協力の専門家とともに首都の保健省に政府高官を訪ねた時、政府官僚は、村落住民とはまったく別の意味での病気と貧困の因果論について語りはじめた。医療援助の話題になると、彼の口から出るのは「私たちの国は中米でいちばん貧しい国であり、病気の罹患率も高い。そのためには、あなたたちの援助が必要なのです」という常套句である。

保健省の高官たちが罹患率の高さを貧困に関連づけて語るのには、明らかに援助を導くためである。これはあるひとつのドクトリンに準拠している。健康で病気のないことは「人間の基本的要求 (Basic Human Needs)」であり、先進国である援助国が低開発国である被援助国に対して援助を行うことは、我々にとってもこの国の行政組織で働く人々にとっても常識だ、という主張である。その常識の文脈のなかに、援助する側とされる側が席を同じくしているのであるから、そのような発話が出ることは当然である。ただし、貧困に起因する不健康さを改善するために必要なものは、政府の高官にとって——村落民やスラムの住人の言うような「貨幣の隠喩」としての——「薬」ではない。それは、財源

不足ゆえに購入できない医療機材であり、資金であり、最近ではプロジェクトを企画するシステムそのものなのである。

5 注入される健康

健康という概念やイデオロギーが、独立して村のなかに横たわっているわけではないことは自明である。言語活動も含めて、人びとの行動つまり実践のなかに、健康の概念がみられるのであって、それを人類学者は観察やインタビュー、対話のなから引き出し出しているにすぎない。したがって、村の人たちになじみのない健康の概念とは、実際には、政府系の保健省による保健教育、家族計画、各種村落開発プロジェクト、あるいは外国からの援助団体の活動のなかで提起されるものである。ラジオや新聞などの一般保健薬広告にみられるような言語や視覚表象を通して、我々はさまざまな健康の概念について把握することができる。

ドローレスでは、私が調査を行っていた当時、政府は保健計画の一環として住民主導の保健教育を試みようとしていた。住民のなから保健省のプロモーションに参加、協力するボランティアを養成し、公的医療の専門職スタッフとの協力のもとにさまざまな衛生活動に従事させるのである。つまり政府主導の「草の根運動」のようなものであった。そのような計画のなかには、健康のガードマンあるいは健康の番人 (Guardian de Salud) とよばれるボランティア養成計画があった。健康のガードマンの養成講習会では、住民による自助努力という側面が強調される。つまり、病気を治してもらおうという住民の受動的姿勢を改め、一人ひとりの努力によって健康を獲得するような住民をつくるのが重要であることを教えられる。ガードマンという表現は、村の人びとにはさほど悪い意味はない。ドローレス周辺ではガードマンは地主の農場を責任をもって任された役職であり、また不安定な生きざりの生業水準を維持する自作農よりも、パトロン (地主) の庇護にある安定した仕事であると考えられているからだ。

講習会では、講師役の保健省職員は、住民に対して次のようによびかけている。「皆さんには、『健康の番人』の役割を推進してもらうために、忘れてほしくないことが三つあります。それは、責任と信頼と協力ということです」「人びとと協力していかなければ、健康は守れません。しかし人は誰でも臆病なものです。あなたたちが、それを克服していかなければならないのです」。

これらの発言は講習会で再三再四にわたって繰り返される。健康は人びとの努力によって達成されるものであるという考えを、人びとの道徳観を通して訴えかけているのである。というのは、ここにあげたようなスローガンは、キリスト教者の友愛の倫理と、中央アメリカ諸国の国民文化のなかでしばしば主張される社会正義 (justicia social) の主張から借用されたものだからである。だが、理想は常に成就するとは限らない。ある保健普及員は、彼らと住民が一体となって努力し簡易便所を設置しても、住民がそれを利用してくれないことを嘆いていた。「どうして、そのようなことになるのですか?」という私の質問に対して、彼は「糞便を放置することが原因となる病気にに対して、(住民の)認識が足りないのだ」と述べている。この種の苦言は、彼の上司とともに普及員たちが定期的に開催する集会や研修会で、繰り返し言及される住民のイメージである。そこには住民の非協力を非難する趣きもある。

一九九〇年になるまで送電線が届かなかった八〇年代のドローレスにおいて、テレビや新聞はまったく普及しておらず、ラジオを聞くことだけが、情報の入手と娯楽という両方の機能をもっている唯一の手段だった。ラジオから流れてくる医療や保健に関する広報や広告の語り口、キャッチフレーズは、人びとによく熟知され、子供たちはしばしばそれを口ずさんでいた。

一九八六年二月のある三日間に聴取されたいくつかのラジオ番組において、四九種類の広告および広報があった。そのうちの四三種は一般保健薬品のコマーションであり、残り六種が政府広報であった。広報は、飲料水を清潔にするプロモーション三種、家族計画二種、および簡易便所に関するもの一種であった。

医薬品広告は、具体的に病気に對して特定の効能があるというメッセージを伝達する。政府広報は「よりよい生活を築いていく (construyendo una vida mejor)」とか「人びとを守る (se protege la gente)」というような標語を用いて健康

を説明していた。例えば、家族計画の広報に次のようなものがあつた。

家族計画のラジオ広報

——責任ある親たちは養えるだけの子供たちをもつべきです。「歌」

女性A…あら、元氣？

女性B…「疲れた声で」あなたはど元氣じゃないわ。

女性A…えつ、私のように健康(sana)になりたい？ じゃあ、お聞きなさい。出産が続きすぎると、女は壊れるものなのつて、お医者さんが言つてたわ。もつと健康に育つ、ぴよんぴよん跳ねる子供をもたなくちゃ。

私たちは、女が健康であるように (una mujer salud), 保証しなくっちゃ。そうでしょう！ そうでしょう！

——責任ある親たちは養えるだけの子供たちをもつべきです。「歌」

このなかで「女が壊れる」には「破壊する (destruir)」という動詞が使われている。それは、このメッセージのなかにある保健省のスローガン「よりよい生活を築く」で使われる動詞「築く (construir)」の反対語であり、それに対比するものとなっている。

ドローレス村における簡易便所の普及率は、政府とNGOのプロジェクトによつて八〇年代中頃に全戸数の五%から五九・六%にまで進展した。その当時流行つていた、簡易便所の日頃の清潔な管理を推進する政府のラジオ広報はメッセージを連呼する次のようなものであつた。

便所の清潔維持に関する広報

——いつも蓋をしている、きれいな便所 (cetrina) は蠅の騒ぎをおこさせません。

——衛生的な便所が正しく使われたなら、より健康になることを手助けします (ayuda a tener mejor salud)。

——水と石鹸で、便所の壁、便座、床を洗わねばなりません。

——なぜなら、水と石鹸でよく便所を洗つたなら、くさく臭わないし、人も守るからです。

——よりよい生活を築く、プラサル (便所普及プロジェクト)、サナア (水道普及プロジェクト)、保健省、そしてアイデア

(米国際開発庁)。

この種の外部からの健康の概念は、現状が不健康であることを住民に自覚させ、あわせて健康が衛生的な実践を通して獲得されるものであることを示唆している。保健教育においては、獲得すべき目標が具体的実践を通して提示され、その達成のために、個人の意図的で不断の努力が必要であると主張される。これは本章の冒頭に述べた「病気がないこと」が健康である、あるいは健康は「神の意思による」という運命的で消極的な健康の概念と好対照をなしている。一言でいうならば、積極的に獲得していくものとして健康がみなされている (池田・佐藤 1993)。外部から注入されるドローレスの人びとの不健康さを自覚せよというイデオロギーは、先に描いた貧困と病気の民俗論法から導き出されるような、「我々はいつとも病氣である」という主張と論理的に対比することは明らかである。しかし、さまざまな教育の機会や援助物資を受けようとする実利的意図が人びとの間に働く時、「我々はいつとも病氣である」という自己表象と、外部の保健省普及員がもちこもうとする「住民は不健康のなかで生活している」という他者表象は、政治的な交渉のための共通の土台に載るのだ。共同体の外部から注入される健康の概念について、次節では別の角度からアプローチしてみよう。



図13-2 「健康的な状態」(1)

出典：Ministerio de Salud Pública (MSP), 1985. *Manual técnico para la utilización del rotafolio de participación comunitaria*. p.25. Tegucigalpa, Honduras : Ministerio de Salud Pública, República de Honduras.

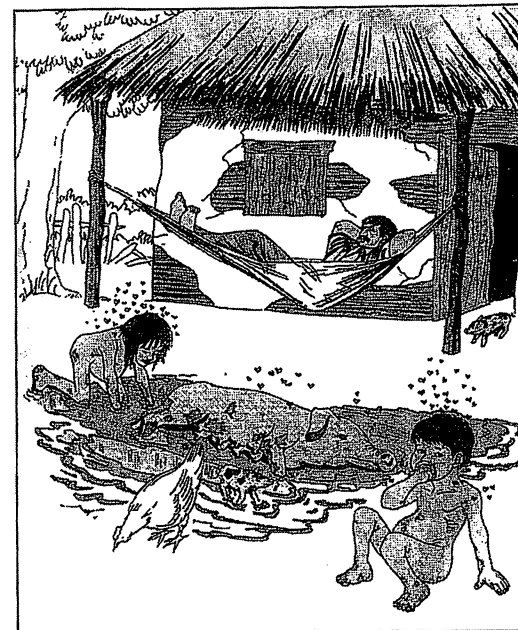


図13-1 「不健康な状態」

出典：Ministerio de Salud Pública (MSP), 1985. *Manual técnico para la utilización del rotafolio de participación comunitaria*. p.21. Tegucigalpa, Honduras : Ministerio de Salud Pública, República de Honduras.

6 不健康の図像学

保健普及員の制度は村落の医療を改善するための制度であると同時に、健康を通して村落を開発するという制度でもある。つまり、保健普及員は近代医療の多様な意味を伝達する存在である。保健普及員の講習会で使われる教材の図像の分析から、その伝達される意味について考えてみよう。

ホンジュラスでの水道と村落衛生の普及員養成に使われていた教材「コミュニティ参加のパンフレットの利用のための技術マニュアル」を見てみよう (Ministerio de Salud Pública 1985)。ここでいうパンフレットというのは配布物のことではなく、イラストや文字標語が描かれている、ロタフォリオとよばれる大きな掛図式の教材資料のことである。講師はこれを使って授業や受講者との議論を行う。

図13-1は村落の日常生活において改善が必

要な不健康な状態をトータルに描いた三枚のうち一枚である。この図は、改善すべき個々の問題を講習を受ける者が発見的に指摘できるように配慮されている。この図では、放し飼いで飼っている豚、そこで泥遊びをする子供、腹部がふくれて蠅がたかる子供、何もしない大人(男性)などが病気を引き起こす原因であり、これを参加者が指摘することを通して学習する。だがこれは同じ教材の別図13-2と図13-3における整った衛生環境、つまり豚を柵で囲い、衣類と靴をつけた子供が玩具で遊んでいる、あるいは大人(男女)が働いている状況と対比されることを前提にしている。実際、良い/悪いという対比は研修の間繰り返され、劣悪な環境とどのようなものであるかということが住民自身が発見できるようにまで教育される。環境の劣悪さは整った清潔な環境との比較のなかで認知され、発見されなければならない。

しかしながら、これらの絵を比較すれば明らかのように、病気と健康の対比はそれ自体で完



図13-4 パンフレット「排泄物をどうするか？」

出典：¿Qué hacer con las Excretas?, 8pp. (Donahue, John. M., 1986. *The Nicaraguan revolution in Health: From Somoza to the Sandinistas.*, p.123, Massachusetts: Bergin and Garvey.)

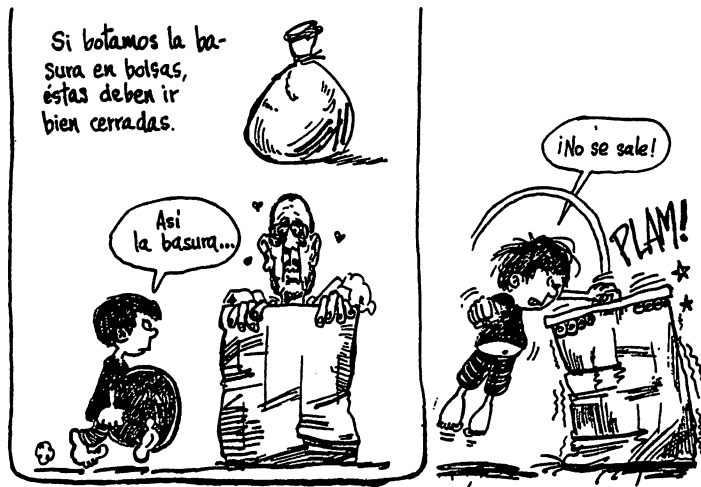


図13-5 パンフレット「ゴミ」

出典：Basura, 8pp. (Donahue, John. M., 1986. *The Nicaraguan revolution in Health: From Somoza to the Sandinistas.*, p.120, Massachusetts: Bergin and Garvey.)

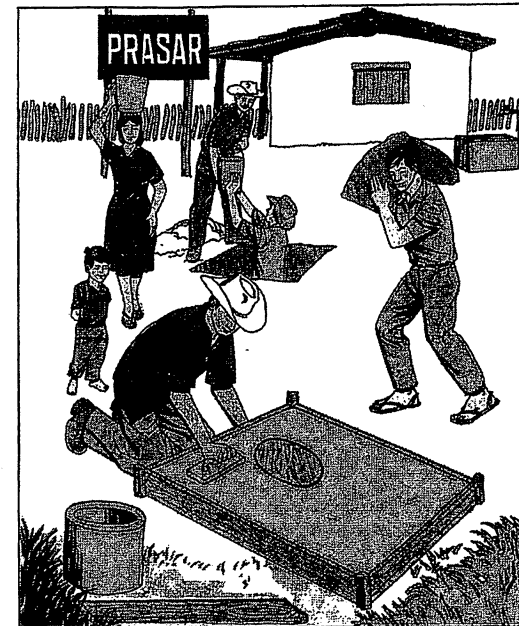


図13-3 「健康的な状態」(2)

出典：Ministerio de Salud Pública (MSP), 1985. *Manual técnico para la utilización del rotafolio de participación comunitaria.* p.29. Tegucigalpa, Honduras: Ministerio de Salud Pública, República de Honduras.

結するようなものではない。病気と健康はそれらをもたらす衛生学的な因果関係の連鎖にとどまらず、社会が定義する病気と健康の因果関係の連鎖のなかに回収されるのである。例えば、女性が不在で男性がハンモックに寝そべっている前で、子供たちが不潔な泥遊びをしている絵は、図13-2、図13-3の健康な家族と対比することによって、ケアすべき母親が不在であることがわかる。この対比は単なる病気発生の環境条件の対比だけではなく、実は、家庭の様子、その経済的条件、物資の所有など多様な次元で、幸福なもの不幸なものとの対比を示唆するものである。近代の公衆衛生施策がもちこもうとしている意味を教育教材に見いだすことは容易である。結核の予防キャンペーンにおいて長期化する咳を放っておくこと、家族計画のキャンペーンにおいて不用意に子供を産み続けることは、すべて病気や貧困、あるいは家庭不和を生むことになると暗示されている。どのような図

ージは図13-5においては、放逐されるべきゴミとして描かれている。図の左側では、「もし袋に入れたゴミを捨てるなら、よく(ゴミ箱の蓋を)閉めておかねばならない」という端書きがあり、蓋をもつ子供が「このようにすればゴミは……」と言いながら蠅のたかったソモサ(「ゴミ」に近づく、右側には台詞の続き「ゴミは 外に出ない!」がある。さらに図13-6では、サンディニスタ兵士、看護者、主婦と思しき女性が行進しながら、次のようによびかける。「我々の革命的プロセスでは、多くの女性が仕事へと統合されています。しかし、これまでみてきたように(サンディニスタの女性政策をさす)、母親はミルクをとってにおいて、彼女が家に帰るまで、子供にミルクを与えたままにしておくことができます」。また横にある貼り紙には「さらに子供が離乳食をはじめるとき、母親がいなくても、離乳食を与えることができます。彼女が帰ってきてから、母乳を与えることができます」。これらは女性の社会参画を促し、家庭内にもって育児に専念しなければならないという伝統的な女性のイメージを打ち壊すメッセージを提示する。

ホンジュラスの教材とは異なり、ここでは健康と病気の因果関係は政治経済的關係に還元されたり、それまでの社会関係の変革を促すようなメッセージのなかに登場する。プリガータII分隊(Brigada)とよばれるニカラグアの保健普及員は、人びとに対して、多くの病気は政治経済的な不公平を解消することによって治ると教育する。健康になるためには人びとの献身的な協力が不可欠だというのである。

中央アメリカの両国の資料を比較すると、ともに病気は否定的な意味を付与され、解決されることが待ち望まれる社会の問題として取り扱われている。しかし、病気という不幸の原因追求はホンジュラスにおいては家庭内での発見と対処に任されているのに対して、ニカラグアの事例では社会的経済的構造の問題を示唆するように水路づけられている。だからと言って、ホンジュラスの説明原理にはプチブルジョアの価値観が前面に出ており資本主義的で、サンディニスタ・ニカラグアの場合は革命的であると私は主張したいのではない。ホンジュラスにも不健康の原因を社会経済学的に説明する普及員はいるし、ニカラグアの保健省当局の担当者は衛生状態の改善が感染症の対策に有効な最初の選択であることを当然知っている。



図13-6 「我々の革命的プロセスでは……」
 出典：En nuestro proceso revolucionario (Donahue, John. M., 1986. *The Nicaraguan revolution in Health: From Somoza to the Sandinistas.*, p. 80, Massachusetts: Bergin and Garvey.)

像にも不幸の因果論ともいえる説明が込められている。病気はあらゆる不幸のはじまりであるという社会的事実を率直に表象しており、また実際そうである。

だが問題は、病気と健康の社会化に関するそのような物語がいつも同じではないという点にある。この教訓を、ホンジュラスの隣国であるニカラグア共和国の事例との対比のなかで考えてみよう。ニカラグアは一九七九年の革命政権樹立後、識字と保健衛生の改善に著しく成果を上げた。当時の革命政権であるサンディニスタ国民解放戦線の政権期(一九七九-一九九〇年)の医療の教育教材からとられた図を三枚掲げてみよう(図13-4、13-5、13-6、すべて出典は(Donahue 1986))。最初の図13-4では、男性が立小便をしながら「この国全体で二〇万以上の便所が必要とされている」と言う傍らで、これも小使している犬の頭のなかに、明らかに罵倒語「●*#!」と思われる言葉を伴って「そして、ソモサは俺たちに金も残さずおいてきぼりにしやがった!」があり、さらに外側に「そして教育も」という文字が入っている。ソモサとはかつての大統領で、サンディニスタ(サンディニノ主義者)たちによって放逐された独裁者の名前である。ソモサのイメ

不幸の因果論的説明とそれを未来の健康に向けて取り除くという点では、それらは共通の地平に立っている。双方とも、現状の改善ないしは変革によって、将来において健康が成就されるという答えを誘導する。この予防の意味は、病氣という不幸を説明する二種類の因果論的説明の相違にもとづく。これは、日常的に生起するプロセスとしての病氣、あるいは病氣になってからはじめて治療が追求されるという、ごく一般的な病氣の治療観とは一線を画している。病氣に対して提示される具体的な処方箋とは、幼児の下痢による脱水症状を防ぐために経口補水療法を行う、簡易上水道や簡易便所を設置する、家族計画に参画する、結核予防の喀痰検査を受けることなどである。他方のニカラグアの民衆衛生教育理論によれば、具体的な保健の実践上、経済的な格差の解消を社会のあらゆる面で試みなければならないということである。

保健普及員の候補者が選ばれる基準、研修で用いられる集団啓発法、そこで主張される社会奉仕の精神、研修の終わりに授与される修了書や登録書、自宅に持って帰り日々の活動に使われる医薬品やイラストの入ったパンフレット類など。これらのことから、近代医療概念が共同体に入ってくる際、それは単に近代医療制度が村落医療に技術移転されるのではなく、強力なイデオロギーとして導入されることがわかる。その文化的な媒介者の役割を担うのが保健普及員である。

7 注入される意味に対する抵抗

ドローレスのみならず、ラテンアメリカのほとんどの地域には公的な医療制度が普及しており、また多国籍製薬企業による医薬品も村落のあらゆるところで見られる。一般保健薬は処方箋なしで薬店で買えることから英米圏では「カウター越しの医薬品」と言われているが、中央アメリカではそれらはポティキンとよばれ、ほとんどすべての薬が薬店で自由に購入できる。このような、専門家の監督圏外での素人による医薬品の処方である自己投薬行為が引き起こす問

題については、第一〇章で指摘した通りである。

医薬品の流入だけでなく、近代医療システムは、人びとの医療行動を規定している。なぜならば、異常出産や重病人などが出た時、患者は山道をハンモックに吊るされて何時間もかけて自動車道路のあるところまで連れてこられ、チャーターした車——チャーター料の相場は決まっておおり衆知である——で病院まで運ばれるのであり、近代医療は身体の危機的状況には必要な解決手段とみなされているからである(第II部扉写真参照)。こと健康や病氣に関しては、人びとの伝統的な概念の墨守と、外部からの異質で新しい観念の導入が、相互に排除しているとは言えない。

ドローレスでは一九五八年に未舗装の道路が外部とつながり、一九七二年以来開設している看護者のいる簡易診療所、あるいは一九八〇年以降、活発に行われるようになった簡易上水道・簡易便所普及プロジェクトや児童福祉を通しての村落開発の民間プロジェクトなどが、常に外部からの「健康」の概念をさまざまな形で流入させてきた。したがって人びとの健康の概念が、より伝統的でありかつ本来的であるという経験上の根拠はなく、外部に由来する健康の概念は、人びとによってさまざまに解釈され、現実には「すでに取り込まれ済み」と言ってもよい。

しかしながら、すれ違いは常に生じる。それは伝統的なものと外来のものという対比が、最も象徴的に出会う場でおこる。その例として、出産介助者(産婆)に対する政府保健省が行った講習会での状況があげられよう。

アルマアタ宣言が採択された一九七八年前後から、プライマリヘルスケア施策として知られる、母子保健、乳幼児への予防接種、経口補水療法の普及などと同様に、伝統医療の施術者や伝統的出産介助者の実態の把握が行われるようになった。そして、ユニセフなどの資金援助によって、出産介助者は、近代医療による消毒や予防の概念を講習会で教えられることになった。次の事例は、ドローレスの簡易診療所で出産介助者たちに行われた、小児の下痢とその対策についての小講習会でのことである。

伝統的出産介助者と看護者

参加したのは六名の伝統的出産介助者(産婆)であった。彼女たちはすでに幾度か、保健省の短期講習を近隣の簡易診療所において受けており、その活動が保健省によって把握されている。「訓練された出産介助者」である。彼女たちは数カ月に一度、保健センターによれば、過去数カ月の出生数、死産数などを報告する。その事情聴取が終わった後、親睦をかねて簡易診療所ではチャルラ(Challa)とよばれる小さな講習会を開く。チャルラはスペイン語で談話や対話という意味だが、クルソ(研修)よりももっとくだけた茶話会レベルの集会である。

講師は簡易診療所の看護婦ロサ(仮名)で、彼女は看護学校の最終年の実習として、一年間の研修の最中であった。ロサは、下痢が引き起こす症状をとりままとめた表を壁に張り付けて、そこに書いてある文言に沿いながら説明をはじめた。だが、出産介助者たちは全員文字が読めないもので、ロサの話を聞くのみである。ロサは「脱水症状」「消化管」といった医学専門用語を使いながら熱心に説明する。出産介助者たちは、ロサの熱弁にしきりにうなずいているが、ほとんどその内容が理解できていないことが、その後の彼女たちとの会話でわかった。

ロタフォリオとよばれる大きな掛図式の絵が描いてある教材で、ロサは出産介助者にさらに説明していった。下痢の脱水症状で苦しんでいると私には受け取れた乳児の絵と、それぞれの身体の部分に病状の特徴が説明された図面が出てきた。というのは、カイダ・デ・モジェラ等の症状が図示されていたからである。しかしながら、出産介助者たちは「なんて可愛いの子供だ」と言いながら、ロサの話にうなずいていった。

説明はさらに、幼児の脱水症状に対する経口補水塩の使用法へと移っていった。それが一通り終わって、ロサが「子供が下痢をした時にどうすればよいでしょうか？」という質問をした。それに対して出産介助者たちは、「レモンを水に溶かして、トマトを与えればいい」あるいは「レモンと塩(色)を水に溶かす」と答えた。塩は、調味料としての食塩という意味と経口補水塩の両方をさしており、出産介助者たちがどちらをさしているのかは不明瞭であったが、一般的な塩なのであろう。というのはメスティン農民の間では、下痢の子供たちにレモン水を与える

という民間療法があるからだ。さらに食物を「熱いもの」と「冷たいもの」に区分する熱/冷二元論によれば、「熱くなったお腹を冷やす」作用がトマトにはあると考えられた上での発言であった。保健省当局が指摘する実際の誤用例として、経口補水塩が現地の子供たちの間で菓子代わりに粉のままなめられているというものがある。補水塩は、菓子とよべるような代物ではないが、きれいなパッケージに入っており、無料で配られるために、関心のない母親が子供に与えているのである。

この講習会が終わった後、診療所のロサは、前もって近所の主婦に依頼しておいたパンとコーヒーを参加者である出産介助者の女性たちに振る舞った。私も参加していたので、その後で、参加者たちに「この集会の感想はどうか」「ロサの言っている意味はわかったか」と聞いてみた。彼女たちの集会の感想はおおむね良好で「次も是非参加したい」という声がほとんどだった。ただし話の前半でロサが言っている内容については、明言は避けたが、わかっていないようだった。ロサに対して、年輩の出産介助者は医学用語がわからないようだとは私は告げたが、ロサは特段の関心がないようだった。というのは、この集まりの主目的は、村落部における出産の資料をとるためであり、親睦をかねた講演会はあくまでも動機づけの一環とされていたからだ。

補水塩の誤解や誤用は、保健省が地域レベルで開催する職員スタッフの集会においてしばしば議題にされるテーマである。そのような文化的齟齬に対して、保健省の職員、村役場の役職たちは、土着的あるいは民俗的な人びとの信条や実践を「誤用」あるいは「未開」の視点からとらえようとする。このような批判の多くは紋切り型で、道徳的非難が含まれる。それは、村役場の書記を長年務めた、ある老人の次のような言葉に端的に表れている。「今でこそ、産婆は保健省などから器具をもらって、少しは衛生的になったが、昔の産婆はマチェテ(山刀)で赤ん坊の臍の緒を切っていたものだ」と。

もっとも、人びとの誤用を批判できる立場の人たちは少数派であり、人びともめごとをおこしてでも、近代化のイ

デオロギーの注入に励む人は少ない。保健省の多くのスタッフも、このような事態には手をこまねいているが、それが重大な問題であると主張する人たちは少ない。保健省の人たちは、住民の自助努力を促進させる政策は十分な医療資源がないための代替的な戦略で、より豊かな医療サービスが提供されるようになれば、そのような考えはやがて放棄されるだろうという考えをもっていた。

8 おわりに

健康の意味を人類学的に考える際には、人びととつての健康の概念が、次に述べるようなレベルでどう作用しているのかということを検討しなければならない。すなわち、個人のレベル、文化や社会のレベル、さらにはそのような文脈を超えたより広いレベルである。それらのどのレベルでも、またレベル間の相互作用を通して、健康の概念が形づくられているのであり、それらは常に動態的に変化している可能性があるということだ。

個人のレベルでは、日常生活における体験や個人史に表れるものとしての健康がある。これには本人の闘病体験、他者の病気への理解、あるいは個々人の身体感覚などが影響を与えている。このレベルでの健康観は、人によってきわめて多様な像をもち、また個人のケースや生活の具体的な内容にまで踏み込まないとその実態はつかみにくい。またその状況に説明をつけようとしても、「熱があっても、水のシャワーを浴びれば治る」というドン・チコの健康観のように、幸運といった概念をもちだして納得することがやつとというものもある。

次に、社会や文化のレベルにおける健康とは、個々人の体験や身体感覚を社会的な文脈で説明し解釈する際に表出され、他者との間で共有することが可能な意味レベルの現象をさしている。文化人類学における民族医学や身体技法、あるいは身体論などは、このレベルに焦点を当てているものといえるだろう。熱/冷二元論や、エンパチョにみられる独特の身体観や疾病観とそれにもとづく薬草や一般保健薬の利用などがある。これらの情報は、個々の情報を蓄積し、そ

れらの相互の比較によって、経験的事実を抽出することができる。

さらに個々の社会や文化の相互間あるいは、それらを包摂する上位のレベルでのデオロギーやそこから紡ぎだされる実践は、観念上の理解を拘束し水路づけるのみならず、現実の行動に直接に影響を与え、そのなかでの行為者の環境をも改変していくものであろう。例えば「病人を救え」というスローガンや「人間の基本的要求」という言明は、現実には医療行動をおこし、国際間の医療援助を引き出し、社会的あり方に影響を与えている。ここでの健康とは、概念と実践のより広域的な流通を通して我々の生活を規定している点で、健康の複数の表出形態のひとつなのである。

本章で紹介された諸事例を、このような視点から振り返ってみると、これら三つの次元は、別個に分離されることなく多層的に関連しているように思われる。例えば、ドローレスの人びとにとつて、個人のレベルならびに社会の認識論や意味論のレベルでは、健康は病気に対峙するものとして消極的な価値しかおかれなかった。しかし、同時に保健省などのプロモーションを通して、健康は積極的に求めるものだというデオロギー的な教化を受けつつある。このことは当然のことながら人びとの健康の因果論にも影響を落としている。

本章では、健康の概念のとらえ方として「土着あるいは民俗的信条」と「外部から導入される信条」という二項対立的な図式からはじめたが、結果的にはそれらは常に相互に拮抗するものではないことがわかった。個人のレベルおよび社会のレベルでは、ともに近代医療の側から見て誤用や無理解がある——つまり認識論的な齟齬がある——ものの、対立や抗争——つまり実践的な齟齬——は表出してはいない。このような事態をドローレスの農民たちは次のように説明している。「若い人びとは年寄りが使っていたドレンシア痛み (colencia) という言葉などはもう使わなくなったのだ。それは古い言葉だ」。あるいは出産介助者たちの「下痢概念の誤解」は概念上はきわめて深刻な事態をなすが、彼女たちは講習会自体を楽しく過ごせる場であったと、満足して述懐する。つまり、認識論的には深刻な齟齬が現地の人びとには意識されず、混乱をおこすことなしに実践的に受容されているということになる。

他方、観念と実践の結びつきが重要となるデオロギーという観点からは、きわめて深刻な事態であり、それは現地

の保健普及員から次のように指摘されている。「ようやく設置したモダンな簡易便所を人びとは受け入れようとしないし、つくっても使わない。彼らは新しい便所に入らずに、相変わらず庭先の陰で糞をひっつけている」と。このことは、保健省当局にとってゆゆしき問題である。なぜなら、そのプロジェクトは外国政府の借款によって運営されているからであり、プロジェクトの成否は、今後の援助の効果評価や新しい計画のインセンティブにも影響する。便所を普及させようとする保健省の普及員に「村人の認識が足りない」と言わしめたのは、このイデオロギーレベルでの葛藤に他ならない。ヘルスプロモーションが、外部から現地社会への健康の意味の注入と現地社会の受け入れのプロセスだけであるなら、それは広義の近代化論の論理であり理解可能である。しかしその実態は、本章のささやかな事例にみられるように、複雑に絡みあった観念と実践の総体である。私は、これこそが健康と名づけられるものの実態であると言いたい。



村落保健センターに集合した伝統的出産介助者（産婆）。手にしているアルミの箱は、ユニセフが近代医療にもとづく助産術の講習を受講した出産介助者に保健省を通してプレゼントした、助産に必要なキット（鉄、ディスプレイの剃刀、綿花、アルコール、包帯など）である。



都市部の低所得住居地区での保健ボランティアの養成活動。ボランティアは住民から互選されるべしという規定があるが、現実には家庭の主婦、学生、失業中の人などがよびかけに応じて集まってくる。一般的に人びとは社会的で議論好きなので、自由討論になると、議論がどんどん発展し、収拾がつかなくなることもしばしばである。

第V部 コミュニティ参加と現代社会